施設紹介
#27

医療法人社団容生会
増田クリニック

東京都足立区南花畑5-17-1
https://www.yosei.or.jp/

院長
増田 勝彦 先生

地域のかかりつけ医として医療と介護の両輪で包括的支援を

増田クリニックを開設したのは1994年です。1996年には「医療法人社団容生会」を立ち上げ、「地域のかかりつけ医」として、医療と介護の両輪で包括的支援を行うべく3つの医療機関と各種介護サービス事業所を運営しています。

当クリニックの開業当時、この地域には基幹病院がありませんでした。日本大学医学部附属板橋病院の勤務医だった私は、「患者さんは病院に来るというのが普通だ」と思っていました。ところが依頼を受けて往診した時に、医療環境として好ましくない状況のなかで臥床する患者さんをみて、こういうことがまだ日本にあるという現実に驚き、非常にショックを受けました。この経験をもとに、「医療・介護と福祉を通じた社会正義の実現」「高齢者が人間らしく尊厳を持って生活できるよう、自らその礎となる」「患者さま・利用者さまの方々に思いやりを持って接する」という基本理念を掲げ、各医療機関との病診連携を積極的に図り、子どもから高齢者まで、地域のみなさまがより健康的な生活を過ごしていただけるよう、日々努力を重ねています。

開業当時から行ってきた訪問診療には外来と同様に重きを置いており、内科のみならず複数科の各専門医も対応しています。現在では介護施設にいる患者さんを含めて600名ほどを約35名の医師が診ています。また、外来診療には新生児から高齢者まで幅広い年齢層の患者さんが来院されますが、やはり高齢者が多いこともあり、9割の方がなんらかの合併症をお持ちです。

当クリニックの特徴は、大学病院から多くの医師を派遣して頂くことにより、紹介状がなくても大学病院と同じ高レベルの診察を受けていただけることです。近隣の大学病院にわれわれの熱意を丁寧に伝え、交渉することで先方の理解を得て実現しています。常設外来として外科、整形外科、内科、総合診療科、小児科、小児外科、肛門科と人間ドック、専門外来としてリウマチ科、神経内科、皮膚科、泌尿器科、循環器科、呼吸器科、リハビリテーション科、麻酔科、緩和ケア科を標榜しています。変わったところでは、ピアスや陥入爪の手術なども行っています。

専門医でないと難しい疾患のある皮膚科の医師を置くようになったのが最初でしたが、患者さんのニーズに応えて、どのような疾患もできるだけ専門的に診てあげたいという思いで進めてきた結果、このように多くの診療科を置くこととなりました。また、開業医の大切な役割は、できるだけ早く病気を見つけ、診断することです。そして、悪性腫瘍含め高度な治療が必要な患者さんは、大学病院や専門病院に紹介するために、正確な診断ができるよう、最新のCT、上部内視鏡、下部内視鏡、超音波診断装置、血管伸展性検査（脈波）、肺機能検査、心電図、ポータブルエコーといった設備も整えています。

尿酸治療は患者さんとの信頼関係で生活指導やアドヒアランスは良好

足立区あるいは会社の検診で尿酸値の異常を指摘された方や、痛風発作が起きて来院される方が多くいます。当院には整形外科がありますので、近隣の整形外科との連携はありませんが、接骨院から「骨の疾患ではなく痛風が疑われる」と患者さんを紹介されることはあります。

初診時には基本的な疾患情報や食事療法、運動療法に関する冊子をお渡しし、問診のなかからその方の生活習慣を汲み取って、随時、生活指導をしています。1カ月ほどした後に尿酸値の改善がみられなければ、6.0mg/dL以下を目指して薬物療法を開始します。残念ながら再診時に尿酸値が改善している方は少ないのですが、薬物療法を開始することに関しては納得してくださることが多いです。この地で長く診療していることもあるかもしれませんが、よく話を聞いてくださって、薬物療法開始後のアドヒアランスも良好です。

高尿酸血症、痛風の患者さんの多くは、糖尿病、高血圧、脂質代謝異常といった生活習慣病もお持ちで、ポリファーマシーの問題も気になるところではありますが、尿酸値を下げることのほうが重要だと考えています。腎疾患のある患者さんの場合には、eGFR値を参考に早めに薬物療法に入ることもあります。

誰もが必要な医療を受けて最期まで人間らしく過ごすために

増田クリニックは2024年12月2日に開設30周年を迎えましたが、開業以来、「医療と福祉の街づくり」を目指して、医師として外来診療・訪問診療を行うとともに、足立区を中心に多くの医療と介護の事業を展開し、「誰もが必要な医療を受けることができ、また最期の時まで人間らしく過ごすことができる」という理想の医療のかたちを追求してきました。もちろん一人ではできなかったことで、こうして続けてこられたのは、私の考えを理解し共感してくれた多くのスタッフや医師を派遣してくださる大学病院に恵まれてきた結果だと思っています。

ただ足立区は、今でも医療過疎なのではないかと思っています。重症の患者さんは大学で引き受けてくれますが、退院された後、全員がご自身に適した病院や施設に入れるわけではありません。行き場のない患者さんがおられますが、もしそれが自分の親だったらどうでしょうか。放ってはおけませんし、いい加減なことはできないでしょう。私が今後実現させたいことの1つに、そうした方々や癌の末期患者さん、神経難病や生活保護の方々が入れる施設を作りたい、という思いがあります。

覚悟を持って力尽きるまで理想に向けて

私自身、朝5時くらいにクリニックに来て、診察前の8時ごろまで仕事とトレーニングすることが日課となっています。診療時間内に仕事が終わることはほとんどありません。日曜日はお昼までの診療ですが、終了時間が19時を過ぎてしまうこともあります。最近は、最も必要な休日夜間の外来・入院を「病院の体制が整っていない」という理由で断る大学病院が増えていますし、働き方改革により、研修医を定時で帰らせて医局長や病棟医長が事務作業をする、という時代になってしまっています。外科医はなり手がいないとも聞きます。

もちろん病院側も働きやすい環境を整え、多くの研修先を提供するといった努力が必要ですが、医師を目指して大学を受験する方や研修医の方には、「そもそも何のために医師になるのか」ということを、もう一度よく考えてもらいたいと思います。この夏1カ月間、研修医と共に診療するのですが、医師を目指すからには覚悟を持って挑んでほしいと思っています。

私自身は高齢になってきましたので家族に心配されることもありますが、自身の健康管理にも心がけ、これからも理想に向けて力尽きるまで使命を全うしていきたいと思っています。